新刊紹介

『支配関係の研究』

池田義祐著

支配関係が、社会学の重要な研究課題であることは、今さらいうまでもないが、正面からそれを取り扱った著書は、少なくともわが国では僅少である。とくに、正統派の社会学説であり、現実適用上も有効性が大とされるドイツ関係学派を中心とする「社会関係」論の立場からの支配関係の研究が非常に少なくなってきているといわれる時に、本書が上梓されたことは、非常に時機を得たものといえよう。

本書は、昭和二五・六年頃から、四十年頃までの間に執筆された論文によって構成されており、その多くは著者の京都大学教授時代に作製されたものである。論考は、ジンメル及びウェーバーの支配論、さらには彼らの影響を受けながら、独自の見解を発展させた高田保馬、臼井二尚の学説の検討、批判を通して、自己の支配理論の構築をめざしたものである。著者によれば、これら先学の理論を「著者自身の立場から再吟味、再検討した。次いで、それらをできるだけ最近の指導関係や権力、勢力関係の諸研究と関連せしめて、従来の一般的な基礎理論と輓近の特殊な指導ならびに権力に関する諸理論との関係を追求し、かくして支配関係一般の包括的基礎理論を現代社会学の次元において、再組織、再構成せんと試みた」とされる。

内容構成は次のようになっている。すなわち大きく弐編に分かれ、第壱編、支配関係の研究というタイトルのもとに、第一章で支配関係の概念が論じられ、第二章で支配関係の本質が、第三章で支配関係の変動過程がとりあげられる。第弐編ではジンメル支配論の研究が行なわれ、第一章・単一支配論、第二章・集団支配論、第三章・多数決論、第四章・組織支配論、第五章・支配関係の相互作用性、のそれぞれについて論究されている。いまここで、詳しい内容の紹介は不可能であるが、いずれも精緻な論理展開によってなりたっている。また、「附説」として、「特殊社会学の研究」と「宗教社会学の研究」が収録されている。これは、著者の比較的初期の研究であり、また、直接、本書の主たる内容をなすものではないが、それぞれの領域における貴重な業績である。

ちなみに、本書は、いちはやく、社会学専門誌（「ソシオロジ」社会学研究会、一九七九・八・第二四巻・一号）の巻頭にとりあげられ、論評が加えられていることをつけ加えておこう。最後に、本書の出版が、現在停滞状況にあるといわれる支配関係の基礎理論の発展のためのよすがともなることを願うものである。

（高橋憲昭）

（A5版・三五〇頁・昭和五十三年十二月・法律文化社・三五〇〇円）